

原著論文

第二次世界大戦下におけるスキーの概念変遷と
その実際に関する史的考察
—国防スキーから戦技スキーへの変遷に着目して—

神田俊平

日本体育大学 期限付一般研究員

Transition of the concept of ski during the World War II
and its historical observation
—Focus on the transition from ski for national defense
to ski for combat tactics—

Shumpei Kanda

Abstract: The form of ski in Japan changed radically since the WWII. Ski before the appearance of ski lifts before the war was seen as a form of ski mountaineering, ski tour, or skiing on a slope. All these take a different form; however, all involved walking, climbing, and downhill skiing. After the appearance of ski lifts, ski became mainly used for the purpose of downhill skiing. With such a considerable change, in general, ski is taken into consideration separately before and after the war and sometimes even thought as if they were separate sports. Presently when the public mentions ski, it means downhill skiing.

To reveal the history of a sport in Japan, it is important to observe the commonality between pre-war and post-war instead of considering them as two separate sports. Although there was a huge transition during the war concerning ski, this importance is especially significant as ski was still used for military purpose even though a number of sports were banned during the war.

Few studies have been conducted concerning the transition of the concept of ski under the WWII. Thus, a large part of the facts around ski remains unknown. Therefore, in this study, the transition of the concept of ski under the WWII was examined by focusing on the history of ski as one continuum. In addition, this study focused on the viewpoints of skiers and used magazines as the main study material. The results are summarized as follows.

First of all, the concept of ski changed mainly because the government limited the citizen's life style, sports, and entertainment in association with the entry to the WWII. Voluntarily refrain was called for, and ski was no exception since it was already established as a mean of entertainment. During this change, the idea that ski should be used for national defense was promoted, and this was the beginning of "ski for national defense." However, this study found that its actual use was not limited for military use. Skiers somehow tried to continue skiing under the name of training and practice for national defense. Thus, ski for national defense was only the name shown to the public in order to prevent ski from being banned. In addition, ski mountaineering and ski tour were promoted since they were expected to produce an improvement in physical strength.

Finally, in association with the worsening of the war situation, the citizens were required to move up from defense consciousness to develop a mind of active involvement in battles. This was called ski for combat tactics in contrast with ski for national defense. Its position was the advanced variation of ski for national defense and the final target. With such background, ski training was introduced to national elementary schools in regions with heavy snowfalls. Also, ski sessions were provided by the army, which strengthened the aspect of actual combat.

(Received: July 19, 2016 Accepted August 5, 2016)

Key words: World War II, Ski for national defense, Ski for combat tactics

キーワード：第二次世界大戦, 国防スキー, 戦技スキー

はじめに

日本におけるスキーの始まりは周知のとおり、明治44年に新潟県高田においてオーストリアハンガリー帝国軍のテオドル・フォン・レルヒ少佐（以下レルヒ）による講習会が行われたことによるものである。レルヒの来日以前にレルヒの赴任した新潟県高田の第十三師団長である長岡外史はスキーに関して、軍事利用以上に交通・体育としての手段として重要視しており¹⁾、計画的かつ組織的な普及策を立案するに至った。その結果、レルヒの高田着任から約1年の日本滞在期間中に国内各地で行われた講習会には学校教師を中心とした積雪地帯に住む民間人も多く参加し、それが地元を持ち帰られることによってスキーは全国の積雪地に普及し、後の全国的な普及の基礎となった。

積雪地帯においてのみ行われていたスキーも大正期に入ると、大学生を中心とした全国規模の競技会が盛んに行われ、一つのスポーツにおける競技としての地位を確立していった。

交通網の発達やマスコミの影響もあり、都市住民のスキー参入が顕著になり、スキーは本格的に全国普及をすることともに、大衆化の様相を見せることとなった。

大衆の娯楽としてのスキーに関しては、主に冬山登山踏破の手段としてスキーを用いたスキー登山や、スキー登山に比べ敷居が低く、スキーを履いて山野行をするスキーツアー、斜面を登り、滑ることを目的としたゲレンデスキーといったかたちで行われていた。その中でも、スキー登山、スキーツアーがスキー本来の楽しみを見出すことができるものとして高い地位を確立しており、ゲレンデスキーは一般的にはスキー登山やスキーツアーのための技術を習得する段階であるとの見解がなされていた。

しかしながら、第二次世界大戦終戦後の昭和23年の秋には、日本最初のスキーリフトが長野県志賀高原丸池スキー場に作られたことがきっかけとなり、大衆におけるスキーの在り方に大きな変化が起こった。このスキーリフトはアメリカ軍専用のものであり日本のスキーヤーのためのものではなかったが、昭和24年に群馬県の草津温泉に国内初の日本人の民間用スキーリフトが建設され、以後全国のスキー場に次々と建設されることとなった。これにより、従来の登攀、歩行を伴い、山岳踏破の達成感を得ることや自然を享受することが目的とされていた大衆の娯楽としてのスキーが滑り降りることだけを目的として行うスキー主流の時代へと突入することとなった。

スキーは一つのスポーツでありながら、以上のよう

に戦前と戦後でその様相が大きく変わったことで、大げさに言ってしまうと別のスポーツとして捉えられている感さえある。日本における一つのスポーツの歴史を繙くにあたっては、戦前と戦後を断続的に捉えるのではなく、戦後のなものを戦前から見出すことが必要であり、特に戦前と戦後で大きな変化があったスキーに関しては大いにその必要性があるのではないだろうか。

ここで、本研究に関連する先行論文を見てみると、スキーに関する通史的研究に関しては、中浦^{註1)}、新井^{註2)}らを中心に戦前を対象とした研究がなされてきた。日本におけるスキー発祥に関しては中浦によって、特にレルヒの来日から全国各地で行ったスキー講習会までに関して詳細に明らかにされている。新井によるスキー用具及びスキー場の発展との関連から見たスキーの普及に関する研究においては、スキーの歴史研究を連続的なものにするという点で非常に大きな役割を果たしているといえることができるだろう。

戦時中のスキーに関する研究に関しては、残念ながらほとんど見受けることができない。戦時中におけるスキーの様相に関しての記述が見受けられる小川の「日本スキー発達史」においては、戦時下におけるスキーに関する催し、スキー競技会、スキーの軍事利用として行われた戦技スキー中央講習会に関する記述が見受けられる。しかしながら、各々の内容は詳細に述べられているものの、当時のスキー界の様相を明らかにするという点では十分に検討がなされているとはいえない。

以上の先行論文を概観してみると、戦前においてはスキーが発祥し、一般大衆に親しまれるようになった時代であり、戦時中においてはスキーが戦術の一つとして軍事利用がなされていたことが理解できる。特に、戦時中に関しては、先行論文の不足及び軍事利用に関する記述が中心であることから、スポーツであったスキーは軍事的に利用されるようになり、以前行われていたスキー登山やスキーツアー、ゲレンデスキーといった様式とは異なる形で行われていたという理解に陥りかねないといえることができるだろう。

そこで本研究では、戦前から大きな変化を遂げたスキーに関して戦後におけるスキーを連続的な視点で捉えるためには、第二次世界大戦下におけるスキーの様相について理解を深める必要があるという前提の下、当時のスキー概念の変遷及びその実際を明らかにすることを目的とする。なお、その実際を繙くにあたり、当時の大衆の考えや行動が分析の対象となることより、その様子をうかがうことができる一般雑誌、スポーツ雑誌、スキー関連誌を中心史料として用いることとする。

I. 第二次世界大戦開戦に伴う 国防スキーへの転換

第二次世界大戦戦前とともに、多くの娯楽やスポーツは自粛を求められることとなった。スキー登山、スキーツアー、ゲレンデスキーといった様式で大衆の娯楽として広く定着していたスキーに関しても例外ではなく、スキーを行う目的に転換を求められるようになった。では、スキーは戦時下においてどのような目的の下行われるようになったのであろうか。高橋は雑誌「旅」の中で、スキーヤーに対する心構えとして以下のように言及している。

「戦時なるが故に、スキーや靴の不足、交通機關の不足、宿舎及び食事の不如意は、これを我慢しなければならない。尚ほそれのみに止らず、他の凡ゆる國民生活に於けると同様に、スキーヤーの行動の自粛が切に要望せられる…中略…スキー大衆の間に眞のスポーツ精神がなく、スキーによつてカムフラージュされた享樂旅行が横行するやうなら、スキーをかついでの旅行は遠慮して貰ひたいのである…中略…今冬、スキーヤーに課せられた問題は、スポーツマンとして或は旅客としての心構へ如何といふことである。即ちスキーをしてこの時局から指弾されない爲には、これを行ふ人々の間に今一度深い反省を要請したいのである。」²⁾

戦時下においては当然のことながら、スキーが娯楽や旅行といった目的で行われることは奨励されるはずもなく、競技スポーツである反面娯楽として捉えられ、行われていたことから自粛を促されるようになったことが理解できる。しかしながら、スキーをすること自体が自粛されることはなかったようである。高橋はその背景として、スキーが戦前までの娯楽としてではなく、戦時下における新たなスキーの有用性が見出されていたことについて以下のように言及している。

「スキーの如きスポーツが眞に質實剛健なる氣風の下に行はれるなら、これは高度國防國家建設に相當の役割を果たすのではないかと思ふ。」³⁾

この記述によると、スキーは戦時下において高度國防國家の建設において大きな意味が見出されていたことが確認できる。

さらに、その具体的な目的として中村はこの時期の戦況に触れながら「今日戦はれている大東亞戦争は、

遠く熱帯地方から温帯地方を越えて寒帯地方にまで及んでゐる。従つて作戰上スキーを國防に用ひることも大いに考へて置かねばならない。」⁴⁾と述べており、また、厚生省体育課の出口も同様に「現在の戰場は支那に限られているが、いつ何時、シベリヤの山野に戦塵が捲擧るか量り知れぬ状態である。もしさうなれば是非スキーに依る軍の機動力が必要となつて来る。」⁵⁾と述べている。

両者の記述によると、スキーは戰場が積雪地帯に及んだ場合の軍隊における機動力という点で重要視されていたことがうかがえる。このことより、スキーが禁止されなかった背景には、スキーに求める意味の転換が起こっていたことを挙げることができよう。スキーは戦時下においても軍事利用、特に国防という点においてに大きな意味が見出され、娯楽としてのスキーが制限される一方で、国防としてのスキーの普及発展が促進されていたことが以下の稲田による記述からもうかがうことができる。

「スキーこそ銃後においてこそまた戦時においてこそますます發展させるべきであつて、今こそスキー家は一層堂々とスキーをなすべきであり、普及發展に各方面協力すべきものだ、スキーをやるのは肩身がせまいなんていふものがあるならばスキーを冒瀆するであらう。」⁶⁾

また、以下の同誌における小島の記述においては、「国防スキー」という名称が使用され、その目的達成のための訓練や研究の必要性について言及している。

「國防スキーの目指す究極の一點が、極寒積雪の山野において敵を制して戦闘に勝利を博するにあることは更めていふまでもない。併しそこまで到達するには猛烈なる訓練、研究、實戰的演習の過程が積まれなければならないのだ。」⁷⁾

以上よりスキーは、戦時下において国防の手段として位置づけられるようになり、戦前における娯楽として行われていたスキーは厳しい制限を受けることとなり、訓練としてのスキーやその研究が奨励されるようになった。また、それらを総称して「国防スキー」と呼んでいたことが確認できる。

II. 国防スキーの実際

ここまでにおいて、戦時下においてスキーは娯楽としての要素が排除され、国防の手段として行われることが求められるようになったことが明らかになった。つまり、第二次世界大戦開戦に伴い、少なからずス

スキーの目的に転換が起こったということができよう。では、戦前において娯楽として広く親しまれたスキーには戦時下におけるその目的の転換によって実際にはどのような変化が起こったのであろうか。その実際が垣間見えるものとして、前出による高橋の以下の記述に着目したい。

「スキーを行ふこと、登山をする事は、勿論個人の趣味とか個人の健康増進とかに役立つこと、なるのは争はれない事實であるが、たゞそれだけに終はるのは舊體制である。高度國防國家建設と云ふ國家の目標に向かつて國家に對して奉仕するためと、スキーや登山を行ふことによつて身體を鍛鍊しなければならない。」⁸⁾

ここで高橋は、スキーは国防國家建設のための心身の鍛鍊でなければならないと述べている一方で、スキーが個人の趣味や健康増進に役立つ、とも発言している。裏を返せば、国防のための鍛鍊の要素が伴っていれば、個人の趣味や健康増進といった目的が含まれていてもスキーをしてもよいと理解することもできよう。

また、以下の記述からみても、国防のためのものと位置づけられているスキーの目的に娯楽が含まれた状態でスキーが行われていたことが推測できる。

「都會人の間に於けるスキーの流行は、健全なる娯樂乃至鍛鍊が置き忘れられて、スキーヤーの外見や態度からは、何となく輕佻浮薄な感じをうけるやうになつてきたのである。…中略…兎に角、スキーをやる都會人の心境には、その服装や食料などに對し、多分に見榮があつたことは否定の出来ないことである。又スキーを口実に、一種の逃避旅行や享樂旅行をした人々も多分にあつたことも見逃せないのである。この結果はスキーが何となく自由主義的な感じを持ち、戦時體制下の今日、今までの行き方ではいけないんぢやないか、といふことを考へさせられるのである。」⁹⁾

この記述からは戦時下においてスキーをするために国防を口実にしていたことや、このままでは本当にスキーができなくなってしまうのではないかと危惧している様子をうかがうことができる。

ここまでをみるに、戦時下においては、スキーを行う目的として国防を掲げることで以前と「同様に」スキーを行うことができる、逆に国防のための鍛鍊としてスキーを行わなければスキーができなくなってしまう、という意図が実際には国防スキーの概念に内在し

ていたということができないのではないだろうか。

また、富永の以下の記述においてスキー界の展望について言及している。

「夥しい都會のスキーヤー達は輸送制限やスキーの車内持込禁止など鐵道當局必死の抑制策も何の苦もなく突破して今年も亦奔流のやうにスキー地目懸けてラツシユすることだらう。如何に體位向上であり、健全な娯樂であつても、時局重大の前には自肅すべきであり、大局を眼につけて所謂國策輸送に協力すべきであることは勿論ではあるが、さりとて徒らに委縮して閑居することはこれ又國家の憂慮時でなくてなんであらう、難しいことではあるが、各人に於いて如何にすれば當局の苦慮に協力しつゝ、スキー行をなし遂げることが出来るか、その邊に多大の苦心が拂はるべきだ。」¹⁰⁾

この記事からは、スキーが戦前は一般的に娯楽として捉えられていた以上、形式上は自肅すべきと言わざるを得ないが、実際にはスキーを行うことができなくなることが憂慮されていたことが理解できる。

中村に関しても以下の記述においてスキーは国防國家建設のために行うべきであると述べる一方で国防とは異なる個人的な趣味、体育としての一面が目的として内在していることを示唆している。また、スキーが国家的意義を持つこと、すなわちここまででいうところの国防を名目に行うことにより、スキーが大いに奨励されるとも捉えられる記述をしている。

「今後のスキーは個人的趣味や體育のみに終始してはならない。飽くまでも、一億一心の實を擧げる爲めであり、高度國防國家建設の爲めであればならない。斯かる目的を明徹ならしめ、スキーを通して之れを實現しようとするときに、スキーは初めて國家的意義を持ち、喰ふか喰はれるかのさし迫つた時局下に於いても、スキーをやつてもよい、否スキーは大いに將勵すべきだといふ結論も出てくるわけである。」¹¹⁾

さらには、直接的に国防スキーの在り方に関して疑問視しているものとして、以下の中村の記述を挙げるができる。

「一體我々は何の爲めにスキーをするのか。唯面白いといふ丈けでは、云ひ換へれば趣味のみの爲めでは、誠に、申譯がない。心身の鍛鍊、それも結構である。銃後にあつては生産擴充の爲め、

一旦お召しに預かつて戦場に出た場合には陛下の御楯となつて立派にお役に立つやうに普段から心身の鍛錬をしておくといふことも必要なことである。だが近頃、心身の鍛錬と云ひ、錬成と云ひ、何だか少し歪んだ見解の下に行はれてゐる嫌がないとも限らないやうな気がする。最つとハツキリ云へば、自己の自由主義的傾向をカムフラージュする爲めに、或は錬成といふ言葉を亂用する傾向がないであらうか。街の山岳會のパンフレット等によく見ることではあるが「錬成登山」とか「錬成スキー行」とか名目打つた行事の内容を子細に點檢して見て、あまりにも今迄の登山やスキーと變りばえのしないのに驚くのが多いやうに思はれる。」¹²⁾

中村はここで、錬成、鍛錬といった名目で行われているスキーに関して、今までと変わり映えしないと言いつていることから戦時下における国防スキーの内容に関しては戦前におけるスキーとほとんど変わらないものであるということが出来るだろう。以下の記述の冒頭においてもスキーをする目的を明確にすることが大切であると述べており、戦時下における当局側の意図にすり合わせている節も見受けられる。

「何をするにもそうであるが、とりわけスキーをやるには、其目的を明確にすることが大切である。他の體育にも増して、スキーにはそれ自身のうちに、云ふに云はれぬ「快樂性」が内在してゐる。その「快樂性」のみを追求して、それ以外の何ものも考へなかつたのが、これまでのスキーヤーの最も悪かつた點である。そうして今日残存してゐるスキーヤーの缺點は其「快樂性」を追ふことにのみ汲々としてゐて未だに新時代に目醒めず、一時的なテレ隠しに「鍛錬」とか「錬成」の語を徒に弄ぶことである。我々は一日も早く視野を擴大して、そういつた舊套から脱し、以つてスキー本來の使命に立ち還らなければならない。そうしてこそ初めて、さし迫つた時局下に於いても尚ほかつ堂々とスキーに乗ることが出来るのである。」¹³⁾

以下の大阪鉄道局旅客課長の楠瀬の記述においては、「積極的に冬を楽しむ氣風をもたらした」、「明朗な國民性を培う上にその功績は大きい」といった、戦時下における国防スキーの考え方は結び付かない娛樂的な意味合いを含んだ記述を確認できるが、苦し紛れに「國民体位の向上に役立った」という戦時的な意味合いとしても捉えられる一文を前半に出すことに

よつて娛樂的な意味合いを曖昧にしようとしている様子が見受けられる。

「スキーが國民體位の向上に役立った點は見逃すことはできない。取分け因循な冬眠の生活から人々を戸外へ開放し、積極的に冬を楽しむ氣風をもたらしたことは、明朗な國民性を培う上にその功績は大きいと云へよう。」¹⁴⁾

以上をまとめると、戦前に娛樂として認識されていたスキーは戦時下において当然のことながら自肅を求められ、その目的として国防が掲げられることとなった。しかしながら当時スキーヤー達は戦時下においてスキーが行うことができなくなることを憂慮した結果、国防スキーと銘打つて実際には戦前と同じ娛樂を目的としてスキーを行つていたのである。その様子を確認できる記述として以下の出口のものを挙げる事が出来る。

「スキーは個人的なテクニツクの華麗さを稱へる個人的スポーツではなく團體的スポーツとしてであり、限られたゲレンデ・スキーでなくてスキー・ツアーでなくてはならない。」¹⁵⁾

「綺麗な服を着て、呑氣な氣持で遊び半分にはスキー行に出掛けるなど甚だ良心にとがめる事だし、又義理にも缺ける行爲である。宜しく戰場勇士の心持してスキーに臨むべきである。さうなれば當然、服装も質素になるし態度も眞面目になり、スキーを通じて心身を鍛錬することが出来よう。又、同時に技術の方面に於いても同様な事が云へる。軍隊にスキーを用ひるとなれば少數では無く全部の者がスキーを操作せねばならない。又、戰場は限り無く廣く、如何なる山野も踏まなければならない。従つてスキーは個人的なものであり得ず、團體的な、ゲレンデ・スキーではなくて山スキーでなくてはならない。」¹⁶⁾

戦時下であるがゆえ、國民の團結が求められていたこともあり、個人的で他の様式に比べて娛樂の要素が強いゲレンデスキーよりは、団體的な要素を含み、鍛錬や錬成といった一面を兼ね備えるのに都合のよいスキー登山やスキーツアーの様式が奨励されていたようである。競技に関しても、以前とほとんど変わらず行われていた様子を以下の富永の記述からうかがう事が出来る。

「全日本の大會が時局切迫のため禁止された

頃は、冬になつたならスキー競技などは全然出来なくなるであろうと観測する向きもあり、當時の空気としてはこの観測も決して過つてはゐないだらうと思はれていたのであるが、目下のところでは明治神宮冬季大會も、ほとんど最初の予定通りに行はれる目安がつまるといふことは、何といても有り難いことであり、我が國の上下ともに、時局が重大であればあるほど青少年の體力士氣育成が重要であるといふ認識が深まつて来た證左とも見られ、いづれにしても結構なことである。」¹⁷⁾

競技に関しても公に行う手前、従来の競技種目に加え、軍事的な要素を含んだ種目が追加されたが、それ以上に変わった点は見受けられない。

以上より、様式に関しては戦前とほとんど変わらない様式でスキーを行っていたことが確認できる。強いというなればゲレンデスキーに関しては国防と銘打ったところで、行うこと自体に好感は持たれていなかったようである。

第二次世界大戦開戦に際して国防スキーという概念が誕生したことは紛れもない事実であったが、戦前に発展し、さらには娯楽として認識されていたスキーが突然国防国家建設だけを目的として行われることは困難だったようである。その背景として、戦前からのスキーが鍛錬や錬成に適していたため、特に国防のためのスキーとして新しい様式を普及させることなく、様式を変えずに目的に国防を掲げるのみに至ったことが要因であるといえることができる。このことから戦時下におけるスキーを行う目的に戦前からの継続ともいえる娯楽の要素が内在していたことは容易に理解することができる。

III. 第二次世界大戦への本格的参戦と 戦闘手段としてのスキー

スキーが国防を目的として行われることが求められ、実際にそれが定着していたとはいえない状況であったが、1941年に日本の宣戦布告による第二次世界大戦への本格的な参戦以降、国防としてのスキーはより実戦に即したかたちで行われることが求められた。以下の小島による記述からもその様相をうかがうことができる。

「現在、北滿の雪の曠野、北樺太の雪の森林地帯共に何ら變化も起つてはゐない。だがそれはそこに嚴として北邊の守りを固めてゐる皇軍將兵の、筆舌につくし難い苦勞の賜物なのである。零下三十度、息も凍る寒氣と闘ひつゝ、國境線の彼

方を見守つてゐる姿を吾々は絶対に忘れてはならない。しかも日本が使命とする大東亞共榮圈の確立は、この北邊の守りを全うしてはじめてその意義がはつきりするのである。それを思ひ、これを考へる時、スキーといふ二枚の板によつてかもし出される國防性に對して、全日本のスキーに眞劍なる研究による國防スキーへの積極的實實を痛烈に要求せざるを得ないのだ。」¹⁸⁾

「全日本のスキー人は、スキーもスキー靴も一つの規格に統一して、いざといふ時には一切を擧げて、直ちに軍隊スキーに轉用出来る位の決意の下に、過去のスキーを清算し、新しい出發點たる「國防スキー」の一線に立つて組織的實實の一路に邁進すべきである。」¹⁹⁾

この記述においては特に国民の戦争への意思統一、即戦力となるべき心構えが強調されていることから実戦における必要性の高まりをみることが出来る。また、以下の同記事内の記述において、以前までの「国防スキー」に対し「軍隊スキー」という言葉が登場していることから同様のことがうかがえる。

「發展過程から分析するならば、軍隊スキーは純然たる軍隊の戦闘スキーであり、国防スキーは軍隊の戦闘スキーの一步手前にある基礎研究訓練の段階にあるスキーといつて差支へない。またさう解してこそ一般のスキー人が今後錬成、發展させてゆく新しいスキー分野の段階を明確にするのである。」²⁰⁾

この記述によると戦闘としての「軍隊スキー」の基礎段階として「国防スキー」が位置付けられているが、実際のところ明確な様式の違いに関しては言及されていない。

さらに、以下の「週刊毎日」の記事からは、「国民皆スキー」というスローガンを掲げ、戦況の悪化による戦闘への準備意識が啓発されていたことが確認できる。

「結局軍隊としてあの新雪を突破して作戦をするためには、どうしてもスキーでなければならず、そのためには、國民全部がある程度までスキーが出来なければならないといふ論が生まれて来る。「國民皆泳」とともに「國民皆スキー」を強調したいといふ譯だ。」²¹⁾

ここまでにおいて、スキーにはより戦闘の手段とし

での実践が求められるようになり、そのスキーを国民全体が戦闘の準備として行われることが奨励されていることが確認できる。この段階においてはまだ、国防スキー同様啓発をしているだけにすぎないが、それが実際に教育というかたちで行われる必要に迫られる様子が、以下の雑誌「週刊毎日」の記事において確認することができる。

「せめて雪国だけでも國民學校から徹底的にスキー教育をする必要がある。それもいはゆるゲレンデ・スキーでは駄目だ。重いものを背負ひ山でも平地でも確實に行ける実用的なスキーだ。スポーツ・スキーも悪いといふのではない。練習の上からは必要であるが、さらに欲しいのはいまいふ実用のスキーである。軍隊のスキーは安全確實第一、そして如何なる行軍、山岳踏破にも耐へるものでなければならない。」²²⁾

また、実際に国民学校においてスキー教育が実際に行われていた様子が、雑誌「週刊少國民」の以下の記事によって確認することができる。

「信州飯山國民學校の兒童は通學にスキーを使ふばかりではなく、高等科の兒童たちはスキー部隊を作り、大きくなつたら北へ行つてお國のために盡すのだと、猛訓練を行つてゐます。この學校では冬になると毎週四時間のスキー實習科目を設け、普通科一年から高等科二年まで他の学科と同じやうに教育してゐるので、千六百名の全校兒童は都會の大人など足もとへも及ばない程スキーが上手です。」²³⁾

以上のように国民学校においても戦局に備えたスキー教育が行われ、ますますスキーが戦闘の手段として実践されるようになり、1943年には戦技スキー審議委員会^{註3)}が結成され、戦闘を目的として行われるスキーを総称して戦技スキーと呼ばれるようになった。この委員会により、まずは指導者の育成が目的とされた戦技スキー錬成指導者講習会が開催され、実際に参加した小島は戦技スキーについて以下のように記述している。

「訓練状況の報告をする前に一言「戦技スキー」なる言葉にふれておきたい。「戦技スキー」といふと何かまた別の「スキー」を持出したかのやうに思はれるかもしれないが、これは吾々が従来主張し、使用してきた「国防スキー」なる言葉を發展的に解消したものである。即ち現在大東亞戦争

の決戦體勢下にあつては、凡ゆるものが国防の一途に強化されなければならない従つてスキーも今更国防スキーといつて競技スキーや山野スキーと並べて存在してゐるかのやうに思はせる觀念は間違つてゐる。競技スキーであらうが山野スキーであらうが、その目標とする所にはたゞ一つ国防のための一點になくなくてはならないはずである。」²⁴⁾

「スキーの技術さへ上手になればそれが国防スキーになるとか、スキーを使用して軍事教練の眞似みたいのことをやればそれが国防スキーだとか、いろいろの国防スキーがこの二、三年來世間にあつたやうであるが、戦技スキーへの名稱の變更と、これが組織的具體化によつてやがてこれらの似而非なる国防スキーは、急速にその影を消滅するに違ひない。」²⁵⁾

以上の小島の記述によると、戦技スキーとは国防スキーという言葉を發展的に解消したものであり、それが組織的に具體化されたことで以前までの目的として掲げられただけにとどまった国防スキーが、実際に戦技スキーというかたちで具體化し、実戦に向けた動き、すなわちスキーが実際に戦闘の手段として軍の訓練において行われるようになったことを示唆している。

スキーが実用的な訓練として行われるようになったことが分かる記述としては以下の大日本体育会行軍山岳部会理事の師尾のものを挙げるができる。

「近來スキー人も滑降や飛型や廻轉理論の種々相のみを専門家らしく論ずる者は有閑階級に任せ、ひたすらに戦技スキーと云ふ名のもとに、国防スキー、軍隊スキー等として講習會を開くこと兩三年に及び特に陸軍戸山學校指導による戦さの役立つ、冬季作戦の國民訓練として生まれ變つて來たことは欣快に耐へぬ次第である。」²⁶⁾

さらに、1944年の1月開催された戦技スキー謙壮丁皆スキー訓練指導者養成中央講習會^{註4)}が行われ、具体的なスキーの軍事利用が進められることとなった。

以上を概観してみると、スキーは国防を目的とした防衛的な意味合いを目的としたものから、日本の本格的参戦によって、実戦における戦闘の手段として行われることが求められるようになった。すなわち、スキーが求められる目的が防衛的なものから攻撃的なものへと轉換したということができよう。また、それが初めて組織化され、具体的に訓練として全国規模で行

われるようになったのはこの時期においてのことであった。

ただし、例外としてスキーが傷痍軍人の治療という名目でも行われていたことが以下の「アサヒ・スポーツ」の記事から確認することができる。あくまで名目であったことが理解できる記述は以下の通りである。

「スキーが實戦に必要なことはいふまでもないことで、すでに陸海軍でもスキー訓練を施してあるが白衣の勇士の後療法としてスキー演習がすこぶる効果あると認められたことはスキーの實用化に一轉機を畫すると同時に戦時運動界の大きな喜びである。…中略…一通り傷が固まると生やさしい方法では効果が目立たないが、スキーだと急激に強い運動をするので思はず障害のある部分を強く刺激し動かないところでも動かすようになる。これが勇士に精神的な再起の希望を與へ、肉體的には治癒の効果を速やかにさせるといふのである、従つて大塚病院長も『スキーが上手になるとは期待していない、思ひ切り滑り、思ひ切り轉んでスキーにより自分の力で機能障害克服の目的を達成してもらひたい』と激励した。」²⁷⁾

これは実際の治癒効果ではなく戦況の悪化による兵士の不足により傷痍兵の戦闘への早急な復帰が強く求められていたことを背景に、精神的な面、特に戦闘意欲を取り戻す目的において効果が期待されたものであるということができよう。

ま と め

以上、本研究において明らかになった、スキーの概念の変遷については以下のようにまとめることができる。

- ・第二次世界大戦開戦に伴い、戦前には大衆において主に娯楽を目的として行われていたスキーが国防を目的として行うよう転換が求められ国防スキーが提唱された。それは防衛的な意味合いが強かった。
- ・国防スキーが主張・啓発される中、日本の本格的な参戦により、スキーはより戦闘の手段として行われることが求められ、戦技スキーの名の下組織化され、より具体化された訓練が行われるようになった。これは戦闘の手段として行われることが目的であることからわかるように、国防スキーと比較して攻撃的意味を含むものであった。

このように概念の変遷から見ると、一見開戦から日本の本格的参戦にかけて段階的な変化がなされているように見受けられるが、注意しなければならないのは、IIで明らかにしたように、その実際として国防時

点においてスキーはまだ娯楽を目的として行われていた事実の存在である。

すなわち、第二次世界大戦下におけるスキーは、まず開戦に伴い啓発がなされた国防スキーは、具体的な様式が確立されることなく、戦前から行われてきたスキーそのものに国防性が目的として求められていたことから、時代における制限はあったものの国防を名目に娯楽目的でスキーを行うことが可能であったということができよう。また、それは日本の本格的な参戦まで行われていたことが確認できる。そして戦局の悪化に伴い、より実戦的な戦闘を目的とした戦技スキーが求められ、国防スキー時期における国民の意識が憂慮された結果、その組織化を伴う具体的実施によって初めてスキーが軍事的な目的のもと行われたのである。

注

- 1) 主な研究として以下の論文を挙げるができる(中浦皓至(2009)第13師団による明治45年の第1回スキー講習会に関する文献的研究. 体育史研究, (26): 1-12).
- 2) 主な研究として以下の論文を挙げるができる。(新井博(2008)レルヒによる高田でのスキー講習開催までの経緯. 体育学研究, 53(2): 227-286).
- 3) 委員の構成は陸軍省3名, 厚生省, 文部省, 体育会, 青年団各1名, スキー部会, 行軍山岳部会各2名, 民間学識経験者3名の計14名で、「日本のスキーに関し、一元的の指令を出し得る最高の機関であり、同時に一般スキーと戦技スキーに関する訓練組織、並びに訓練段階を立案し作成することを任務とする」使命をもって発足した(小川勝次(1956)日本スキー発達史. 朋文堂: 東京, p. 311).
- 4) この講習会の狙いとして、戦技スキーはどういうものであるかという訓練と、雪国出身者には少なくとも一通りスキー技術の基礎を身につけておく必要があるという軍部の意見によって開催されたものであり、全国に戦技スキーの講習会を行うことができる指導者を養成することが急務とされていた背景がある。参加者の内訳はスキー部会関連119名, 青年団25名, 在郷軍人33名, 日本新聞会24名の計201名に加え別途海軍機関学校, 陸軍幼年学校からも参加者があった。なお、講師は陸軍戸山学校, スキー部会, 行軍登山部会, 体育会から派遣された35名であった(小川勝次(1956)日本スキー発達史. 朋文堂: 東京, p. 314).

引用・参考文献

- 1) 山崎紫峰(1936)日本スキー発達史. 朋文堂: 東京, p. 15.
- 2) 高橋次郎(1940)スキーヤーの組織化. 旅, 17(12): 8.
- 3) 同上書
- 4) 中村謙(1940)錬成スキー行. 旅, 19(12): 39.
- 5) 出口林次郎(1940)スキーヤーの覺悟. 登山とスキー, 10(2): 12.

第二次世界大戦下におけるスキーマの概念変遷とその実際に関する史的考察

- 6) 稲田昌植 (1940) スキーマの受難. アサヒ・スポーツ, 18(27):24.
 - 7) 小島六郎 (1942) 国防スキーマの要諦. アサヒ・スポーツ, 20(6):4.
 - 8) 高橋次郎 (1940) スキーマの組織化. 旅, 17(12):8.
 - 9) 同上書
 - 10) 富永正信 (1940) スキーマ界今シーズンの展望. アサヒ・スポーツ, 18(28):14.
 - 11) 中村 謙 (1940) 錬成スキーマ行. 旅, 19(12):39.
 - 12) 同上書
 - 13) 中村 謙 前掲書:38-39.
 - 14) 楠瀬通 (1940) 享樂スキーマ排撃. 旅, 17(12):13.
 - 15) 出口林次郎 (1940) スキーマの覺悟. 登山とスキーマ, 10(2):12.
 - 16) 出口林次郎 前掲書:13.
 - 17) 富永正信 (1941) 嚴冬の華! スキーマスケート界展望. アサヒ・スポーツ, 19(24):16.
 - 18) 小島六郎 (1942) 国防スキーマの要諦. アサヒ・スポーツ, 20(6):4.
 - 19) 小島六郎 前掲書:5.
 - 20) 小島六郎 前掲書:4.
 - 21) 毎日新聞社編 (1943) スキーマは武技だ. 週刊毎日, 22(5):5.
 - 22) 同上書
 - 23) 朝日新聞社編 (1943) 僕らのスキーマ部隊 長野懸・飯山國民學校. 週刊少國民, 2(6):ページ数記載なし.
 - 24) 小島六郎 (1943) 戦技スキーマ錬成指導者講習會に参加して. アサヒ・スポーツ, 21(5):14.
 - 25) 同上書
 - 26) 師尾源藏 (1943) 行軍登山とスキーマ. 體育日本, 21(8):19-20.
 - 27) 朝日新聞社編 (1943) 白衣の勇士にスキーマ療法. アサヒ・スポーツ, 21(5):5.
-
- 〈連絡先〉
著者名: 神田俊平
住 所: 東京都世田谷区深沢 7-1-1
所 属: 日本体育大学期限付一般研究員
E-mail アドレス: shumpeikanda@nittai.ac.jp